



# この人を たずねて

九州大学基幹教育院 准教授

## 山田祐樹 氏

インタビュー  
岡村尚昌



Profile—やまだ ゆうき

九州大学大学院人間環境学府修了。博士（心理学）。山口大学時間学研究所助教（特命）などを経て、九州大学基幹教育院准教授。専門は認知心理学。著書は『感性認知：アイステーシスの心理学』（分担執筆、北大路書房）、*Awareness Shaping or Shaped by Prediction and Postdiction*（共編著、Frontiers Media）など。

### ■山田先生へのインタビュー

—先生は幅広く研究されていますが、現在、特にどのような関心を持って研究に取り組んでいるのでしょうか？

いま中心に研究しているのは、科研費が採択されたという理由もありますが、「気持ちの悪さ」いわゆる「嫌悪感」について一番強く興味を持って取り組んでいます。今のところまだ日本国内では、「嫌悪感」の感受性を測定する日本語版尺度がありません。しかし日本語版の尺度がないと「嫌悪感」の個人差を検討できませんので、どのような心的メカニズムと「嫌悪感」が関係しているのかを明らかにするような研究が十分にできません。そういう状況ですので、最初に取り組んでいるのが日本語版の嫌悪感感受性尺度の開発です。

もう一つ、大学院生と共同で進めているのですが、「トライポフォビア」といって、蓮コラに代表されるようなポツポツの集合体に強い嫌悪感を抱くことに関

する研究です。2013年にこれに関連する論文がWilkinsによって*Psychological Science*に初めて掲載されてから認知されるようになったのですが、実はなぜそのような集合体に嫌悪感や恐怖感を抱くのかよく分かっていないのです。2013年に掲載された論文では、トライポフォビアを起こす原因がポツポツのような視覚刺激が保有する妙な空間周波数の特徴にあり、その特徴がヒョウモンダコや蛇などの有毒生物が持っている模様空間周波数特性と似ているので、嫌悪感や恐怖感を引き起こすメカニズムがそこにあるのではと説明しています。それに対して本当なのか？と興味・関心を抱いています。

—嫌悪感やトライポフォビアについて研究しようと思ったきっかけや魅力があればお聞かせください。

正直に言って、きっかけは特にないんです。ただ、トライポフォビアに関しては、そのメカニズムを空間周波数という知覚的な段階で説明しているの、本当にそれ

だけで説明できるのかどうか？他に心理的な要因が絡んでいるのではないか？という気持ちが先にありますね。それと、刺激が自分でも気持ち悪すぎて逆に笑えてくるのが研究へのモチベーションになっています。研究を続けるうえで、知りたい、やっていて面白いと感じることがどうしても必要だと思っています。

—その他に先生が研究や論文を執筆する際に心掛けていることや、こだわりなどがありますか。

個人的にはタイトルこそ自分のオリジナリティを一番に発揮できる場所だと思っています。そこで、凡庸なタイトルはつけたくないと思っていて、論文を読む人にどんな研究なのかをアピールできるように、少なくとも読ませる最初のきっかけになるようなタイトルをつけたいと思っています。これは好みがあると思いますので、他の人には押しつけはしません、自分ではそう決めています。

—確かに先生の業績を拝見すると、魅力的で一目でどんな研究なのか分かるタイトルだなと思いました。それに加えて、先生の研究はオリジナリティ性が高いように思いました。

ありがとうございます。もちろん伝統的な心理学は大事だと思いますし、それがベースにないと自分がやっていることが新しいのか判断ができませんよね。そこはしっかりと押さえた状態で伝統的な心理学だけではなく、新たな視点の心理学、特に他の大学でも誰もがやってなさそうなテーマで研究をしたいと思っています。そのために、研究や論文を執筆する際はスピードも重視しています。これによってクオリティが疎かになっては駄目なんです、特に動き出してからのスピードですね。時間をかけて熟考するのは大切な



と思います。しかし、動き出してから、自分にとって大きな理由がないにもかかわらず、途中で一時的にストップしてしまうのは無益なことだと考えています。これも自分自身のこだわりであって、他の人や特に学生には強制することはありません。

——「嫌悪感」の話に戻りますが、今後の展望についてお聞かせください。

「嫌悪感」とは、ほとんどの場合、嫌悪を抱かないでよい対象に対して抱いている感情なんです。もともとは自分を毒物や感染から守るための機能だとされているのですが、現在では例えば、ある人物や物に接したところで別に関心や健康上の被害は何もないはずなんですけど、そのような対象に対して気持ち悪いと言ったりして「嫌悪感」を抱きやすい。ですから、私は人の行動や振る舞いの範囲を狭めたり、社会関係を著しく阻害したりする要因の一つが嫌悪感だと思っています。この「嫌悪感」のメカニズムが解決できれば色々人の行動というのか、人ができることが広がっていくと考えています。

——「嫌悪感」についての研究はまだまだ発展途上で、今後さらに発展していきそうですね。

そうですね。強迫性障害でもそうだと思いますが、本当であれば自分は何事もなく自由に生活したいのに、特定の物や、ある人物が関係する事象に関してすごく嫌な気持ちが出て、何も触れられないとか、外出することができないといったこと、もっと身近なことだと考えると、これは食べられない、その場所には行きたくない、ということが日常生活の中であれば人の行動を縛っていることになりそうですね。

もし「嫌悪感」を解除、もしくは

は消去することができるのであれば、多くの人にとっては活動を広げていくことが可能になるので、メリットは大きいと考えています。ですからその応用には非常に興味を持っていますね。昆虫食とか。

### ■インタビューの自己紹介

#### 同世代の研究者にインタビューを行った感想

今回、同世代、それも同じ福岡県内の大学に所属する研究者から直に話を聞けるという大変貴重な機会をいただきました。山田先生はこれまで非常に幅広い研究を行ってこられました。その中で今回お話しいただいた「嫌悪感」研究に関する内容は、心理臨床をかじった程度の私には非常に興味深く、応用・実践につなげるための基礎研究の必要性と面白さを再認識するきっかけになったと感じています。

また、山田先生は他領域にも関心を持たれており、飼育下の動物と野生の動物との比較のような人と動物（イルカなど）との関係や、過去の人と現在の人との心理的比較、さらにはロボット工学と心理学のコラボなどの共同研究にも積極的に取り組んでおられました。先生が「霊長研の先生との研究がすごくスパイスになっている」とおっしゃったのが印象に残っています。

山田先生とのお話はとても楽しく、インタビューの内容全てをご紹介できないのが非常に残念に思っています。インタビューの内容から

脱線した話で盛り上がることも多々あったような。。。

#### 現在の研究テーマと、今後どのような研究を取り組みたいか

これまで唾液中バイオマーカーであるMHPG（脳内ノルアドレナリン神経系の活動性を反映）とImmunoglobulin A (IgA)（免疫系の活動性を反映）、コルチゾール（代表的なストレスホルモン）を用いて、臨床研究やストレスのフィールド—実験的研究、そして香りがヒトの認知機能に与える影響に関する認知・生理心理学的研究を行ってきました。

今後、唾液中バイオマーカーの個人間の性差や個人差に加えて、個人内における動態のメカニズムについて、ストレスの性質や強度によってこれらの反応がどのように異なるのか、時間的な反応変化を含めて詳細に検討したいと思っています。しかしながら、心理的介入などの効果やポジティブな側面の客観的指標としてはまだ満足する知見が得られていないように感じています。健康が創生されていくポジティブな側面や過程を反映する指標として唾液中バイオマーカーが有用な指標になり得るかについても注目していくことが大切だと思っています。

また、最近では睡眠に非常に興味を持っており、心身のストレス反応を媒介すると目される睡眠の主観的・客観的評価との乖離について、心理社会的要因や生理心理学的ストレス反応との関連性も含めて明らかにしたいと考えています。



#### Profile—おかわら ひさよし

2006年、久留米大学大学院心理学研究科博士課程満期退学。博士（心理学）。2007年より久留米大学高次脳疾患研究所助教。専門は生理心理学、健康心理学、ストレス科学。著書は『最新心理学事典』（分担執筆、平凡社）など。